

「チャ、チャンネルを回さないで〜❤️」

プロデューサーの指示を受けて水着姿の麗子はその大きすぎると言える胸を自分で持ち上げるようにしてみせる。

金髪美女にてスタイル抜群の麗子、そんな彼女が水着に包まれた大きなおっぱいを下品にも“ゆさゆさ❤️”と揺らす姿はかなりセクシーであった。

美貌を赤らめさせて、照れた顔をしつつ、指をその爆乳に”むにゅ❤️”っと食い込ませて、持ち上げつつ回していく。

それを見ていたプロデューサーは「う〜ん、なあんかインパクトが足りないと思わないかね？」などと言い出していた。

スタッフもそれを否定することなく「そうですね」などと同意していく。

「インパクトって、これ以上何かしろっていうの!？」

そのリアクションに麗子は顔を真っ赤にしつつ声をあげるけれど、プロデューサーたちは既に「ハート二プレスだけの姿で」だとか「いやいや、ここは絆創膏で」などと話し合っていて麗子のほうを見もしない。

同じ現場にいる中川は「麗子さん、諦めよう」などと言っているのだが――。

「そうだ！ せっかくだしキミにも参加してもらおう！」

「えええ!？」

――プロデューサーの思い付きは止まることなく中川を指さして参加を決める。

指名された中川はいきなりすることに驚き、それに抵抗する間も、反論も許されるずに話だけは素早く進んでいく。

麗子はそれを見ながら「圭ちゃんあきらめが肝心よ……」などと頬を赤らめつつ、怒りと恥じらいを押し殺して告げていた。

そして、プロデューサーたちの話し合いが終わり、撮影が再開された。

麗子は変わらずの水着姿ではあるものの、中川は――。

「全裸のままやるんですか!？」

――全裸のままの撮影となった。

「モザイクは入れるから」と強引に進めるスタッフたちに抗議はするものの意見は通らない。

部長の誕生日プレゼントの為だと自分に言い聞かせていき、それは麗子も同じだった。
そして、撮影のスタートがかけられると麗子がまずは水着姿で立って、その大きすぎる胸を見せつけながら――。

「チャンネルは～……」

――と言った瞬間に全裸の中川が背後に迫る。
一瞬躊躇いつつも両手でそのおっぱいを後ろから驚掴みにした。
その刺激に麗子は一瞬身体を震わせるけど何とか耐えて、中川はそれを感じつつ、彼自身も「これ乗り越えれば……」という希望を持ちつつ、そのおっぱいを揉んで揺らしていく。
その動きに合わせて麗子は笑顔で――。

「回さないで～❤️」

――とカメラに向かっていく。
ゆさゆさと大きすぎるおっぱい、形も綺麗な爆乳を揺らされていく。
中川は無心で、とりあえずこの撮影を終わらせようとしているのだが、プロデューサーからは「もっと揉んで！ デカ乳を水着からポロリさせる勢いでいけ！」などと指示が飛んでくる。
麗子も中川もその指示を拒否したい気持ちはありつつも、耐えていくばかり。
しかし、中々OKは出ないでいた。
中川の揉み方が甘いと、もっと揺らせ、その下品な乳をもっと揉みしだいて揺らしてカメラに見せつけろ！
そんな指示が繰り返されていき、それに麗子は――。

「……圭ちゃん、このままじゃ終わらないから一気に終わらせちゃいましょう？」

――そう提案した。
これ以上撮影が長引くのはよろしくない判断して、やるなら一思いに終わらせようとそう決めたが故の言葉だった。
それに中川も頷くしかなく、改めて麗子が「チャンネルを回さないで～❤️」とセリフを言った。
半ばヤケクソなその叫びを受けて中川も、これ以上無駄に引き延ばすのは麗子に悪いと判断して身体を密着させるように、全裸のまま抱き着いた。

「っ……！」

抱き着いた瞬間に中川は気づいたけれど、麗子の形良く大きめのお尻に股間のチンポが当たってしまっていた。

それに気が付いて「麗子さん……！」と声をあげるが、彼女は「早くやっちゃって！」と急かすばかり。

麗子としても恥ずかしいこの撮影は早く終わらせたい気持ちが強いのだ。

その気持ちを汲んだ中川はお尻にチンポを押し当てながら麗子の爆乳を揉んでいく。

「うっ……！」

大きな胸を揉みながらチンポはお尻に触れて、二人の動きで擦れて快感を覚えてしまう状態になっていた。

気持ち良さに声を漏らすけれど、耐えるしかない状況で必死に気を紛らわせようと激しく麗子のおっぱいを揉んでいく。

二人とも早く終われという願いのみでやっているのだが、プロデューサーたちは満足しないようだった。

必死に揉んでいく中川、そして揉まれる麗子を見て「男の方は良くなったけど、女の方はもっとリアクションとって！ 腰振ったりしていこう！」などと追加の指示が飛んだ。

それに麗子が怒りそうになっていたけれど、ギリギリで押さえていき――。

「やれば良いんでしょ！？」

――腰を左右に揺らして見せだした。

それにより中川のチンポも当然擦られ刺激されていくことになる。

「れ、麗子さんっ……！ ちょっと、まずいですって……！」

「撮影を終わらせるためなんだから圭ちゃん我慢して……！」

スペースの大きなお尻にチンポを擦られていき、中川は追い詰められていく。

麗子のその女を捨てたような動きにプロデューサーは大いに満足しているようで、やっ
と撮影終了に兆しが見えた時に――。

「っ！ ダメだ……！ も、ああ！ あ！」

「え？ 圭ちゃ……あ！」

——中川はついに限界が訪れてしまう。

麗子の爆乳を揉みしだきながら、お尻でチンポを擦られてその刺激に“びゅる！”と射精してしまう。

チンポを跳ねさせながら、麗子の大きなお尻と背中に精液をぶちまけるようにしてしまった。

「ひゃあああん！？ 圭ちゃん！？ なに！？」

急な刺激。いきなり生暖かいものを背中にかけられた驚きに麗子は声をあげてバランスを崩してしまう。

その拍子に中川の手が水着を掴んでしまい、おっぱいが“ぶるんっ♥”と零れてしまう。

そして中川は中川で射精中のチンポを見せつけるようにのけ反っていき二人そろって転んだ。

ある意味放送事故、大事故なのだが、プロデューサーらスタッフは——。

「オッケー！ イイのが撮れたよ、君たちもわかってきたね！」

——と大喜びで手を叩いていくのだった。

それを受けて麗子は「さっきの絶対撮りなおして！ 私おっぱい出ちゃってるじゃない！」と猛抗議をしていくが、中川は疲れ切ってしまいその場にへたり込むだけだった。

結局、麗子の抗議が認められたのかそうではないのかは分からないままに、二人は休む暇もなく次の撮影へと駆り出されていくのだった。